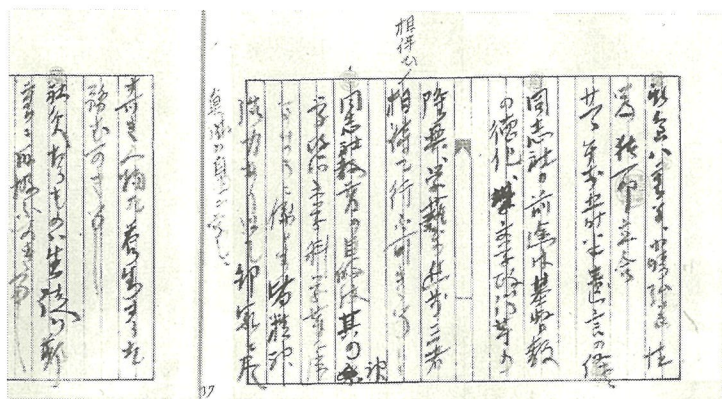


新島襄生誕一五〇年を迎えて

——二十一世紀の同志社に向けて——



新島襄の遺言「同志社への10カ条」の冒頭

出席者

(アルファベット順)

遠藤 彰 広島女学院大学長

(同志社大学名誉教授)

原 正 同志社大学工学部教授

(元同志社大学長)

北垣宗治 敬和学園大学長

(同志社大学名誉教授)

岡野久二 滋賀女子短期大学長

(同志社女子大学名誉教授・元学長)

田中久雄 同志社高等学校教諭・

同志社幼稚園長

(前同志社高等学校長)

司会 河野仁昭 同志社社史資料室長

■新島襄を創立者とする同志社

河野 お忙しくしていらつしやる先生方ばかりにご出席をお願いしまして、恐縮に存じます。

改めて申し上げる必要もございませんが、永眠一〇〇周年記念日から三年間ほど、同志社は新島記念のさまざまな行事・事業をやつてまいりました。これらの行事は新島を顕彰するという意味もありますが、この節目でもう一度、彼の教育理想、キリスト教、さらには国際性といった問題を見直すことによって、同志社ひいては日本の教育の現状を考え、二十一世紀に向かって在り方を探らうのではないかと、そういう契機にしようじゃないか、ということだろと思うのです。

それがこの座談会のテーマだといえはいえませんが、そこはご自由にお話し合いただけばと思います。問題提起もかねて、まず北垣先生からご発言いただけますと有難いのですが……。先生は長年にわたつて新島研究をなさつておいでですし、種々の新島伝の翻訳もして下さつていますので。

北垣 私は、一九九一年にスタートいたしました新潟県の敬和学園大学というキリスト教主義の大学に同志社から移らせていただきました。そしていま草創期の苦しみをなめつづ毎日をご過ごしているところでありますけれども、同志社を新潟のほうから見、新島襄を考えますときに、いちばんすばらしいことの一つは、新島襄が同志社をつくるに当たつて、自分はこういうことをしたい、こういうことをすべきであるということを、「同志社設立の始末」とか「同志社大学設立の旨意」なんかで非常にはつきりと規定し、定義し、再定義するという努力をしていることです。この文章は、同志社が続く限り、同志社の原点を振り返る場合に、まことにありがたいものだと思うのです。

これに匹敵するものは、私の大学にはないわけです。だからいまのうちにだれかが書かねばならない。私、初代学長ですから私が書かねばならないということになるわけですが、その場合、新島が打ち出した、キリスト教にもとづく徳育を抜きには考えられません。私の学校もキリスト教主義ですから、キリスト教にもとづいて品行を鍛え、人材を養成する

というあの新島の主張を引き継がざるを得ないわけで……。

河野 今日もおそれが必要だと……。

北垣 そうです。どこに出しても恥ずかしくない主義だと思います。

遠藤 同じような感想を私ももっています。私も長年同志社にいて、同志社の中から同志社を見ていたんですけど、三年前から外から同志社を見る観点が与えられて、いろいろ感ずるところがあります。

一つは、やはり同志社というのは新島襄が始めて、そのあとに続くすぐれた人たちが次々にバトンタッチして今日まで支えてこられたな、ということを思います。いま私がいる学校も、百七年の歴史をもつ女子だけの古い小さい学校です。創立者を助けた女性の宣教師がいまして、四十数年も頑張つて礎を築き、学校の標語もその人がつくり、いまもそれは生きています。

そういう学校にいて同志社を見ると、ほんとうにすばらしい学校だと感じます。というのは、新島先生の人柄とか、生涯、それからやはりあの人は思想家であり教育者であつたと思うんですが、そういうものをもっている



遠藤 彰氏



原 正氏



北垣宗治氏

人がつくった学校は、キリスト教主義の学校のみならず、私立大学、私立学校全般に広げて考えてみましても、非常に希有な学校だということふうに思うんです。

河野 外から見ると、内部にいては見えなかったものが見えてくるというのは、わかるような気がします。

遠藤 新島先生の後継者のことでふと思ひ出しますのは、牧野虎次先生ですね。

河野 牧野先生は新島の最晩年の教え子の一人ですね。

遠藤 私が同志社中学に入學したときは湯浅八郎先生が総長で、在学中に牧野先生にかわられた。確か昭和十五年だったと思います。が、栄光館で創立記念式がおこなわれまして、そのとき始めてパイプオルガンが演奏されたように記憶していますが、オルガンを弾かれたのは神学部のE・S・カープ先生でした。

壇上には、中央に牧野総長、その両側に配属将校が四人か五人、軍刀を持って座っていたんですが、カープ先生がフォルティシモでピアノと演奏を始めた途端に、配属将校は驚いて十センチぐらい腰を浮かした。ところが牧野先生は、前を見たまま泰然として座ってお

られたんです。

後々まで私たち学生仲間は、「あのときの牧野先生の姿は同志社の象徴のようなものだ、軍部がいくら力で抑えつけようとしたって、そんなことはできやしない」と話し合ったものです。そういう総長が代々、新島先生のキリスト教主義といえますか、教育の伝統をしっかり受け継いでこられたんだと思ひました。

■キリスト教と世俗化

北垣 キリスト教主義教育というとき、そのキリスト教ですが、二十世紀末の日本、そして二十一世紀の日本ではもつと世俗化するだろうと私は思っています。そうなりますと、新島が掲げた教育の理想は、この学校から消えていくかも知れない。私はその問題をもつと突きつめて考えるべきだと思っています。

クリスチャンが学校的首脳部からも減っていつていられるでしょう。もちろんクリスチャンでない方にも立派な方がいらつしやるし、クリスチャンにも駄目な人がいます。仏教徒にだって立派な人がいる。同志社ではクリスチ



河野仁昭氏



田中久雄氏



岡野久二氏

ヤンでない方が、キリスト教を否定されないで頑張つて、とてもいい働きをしておられるのも事実です。しかし、新島襄がいま蘇つたら、「これではまずいよ」と言うのではないかという気がするわけです。一朝一夕に解決し得る問題ではありませんけれども。

田中 私は同志社のキリスト教を考えますときに、言葉が適切かどうかはともかくとして、新島先生の場合、受肉して結集している、その伝統がずっと生き続けていると思うのです。キリスト教が裸のままあるのではなしに、もつと具体的なものに結集して生きているという……。

河野 裸というのは、抽象的な観念とか教理とかいったものでしょうか。

田中 そうそう。そういう信条だとか道徳だとか倫理とか、それらも必要ですけども、そういったものが地や壁に染みつき、香りとして感じられる、私たちを包みこんでくれる、それが同志社におけるキリスト教やないかと、同志社礼拝堂（チャペル）などへ入りますと、そんな気がしてしやうがないんですなア。同志社においても、北垣先生がおっしゃるようになります。しかし、そういう

うかたちで生きているんやないかと。

河野 岡野先生はいかがですか。女子大学の学長をされて、現在は遠藤先生や北垣先生と同様、同志社外の学校で学長をなさっておられるのですが。

岡野 同志社の外へ出てみると同志社のよさがわかる、ということはいえると思います。今度の学校は短大ですが女子の学校ですから、私自身なんにも抵抗はございません。ただ、学長として困りますのは、同志社のように新島先生がおられないし、バイブルもないことです。それがないから話がしにくいのです。

いまの学校は大正七年ごろ裁縫学校として始まった学校ですが、創立者は新島先生のようにお考えをまとめて書くとか、人に教えるといったことをあまりおやりにならなかった。あとで「心技一如」とかいって立学の精神をお建てになりましたが、新島先生のようにそれを裏付けるものがないですからね。

それと、お話をうかがいながら思ったのですが、北垣先生がおっしゃる「世俗化」というのはなんですか。

北垣 定義するなら、神なしでもやっていくという考え方になるのが世俗化です。

岡野 同志社は神なしでやっていけるという傾向になってきていると……。

北垣 まさにそうです。だからチャペルに出なくたって、いつこうにかまわないんです。

岡野 私はそれほど同志社の現状に絶望していませんね。たとえば同志社大学の二万人の学生が、全部チャペル・アワーに出てもらなさい、むしろそのほうが異常でしょう。

確かにかたちの上では同志社大学のキリスト教は形骸化しています。キリスト教教育もまあそうだけでも、卒業した人たちはちゃんと同志社人になっているでしょう。他大学の卒業生と比較してみたらはつきりわかりますよ。これはやはり目には見えないけれども同志社精神というか、新島精神というか、そういういたものを身につけて卒業しているんです。だから私は北垣先生のように……。

北垣 私は同志社に絶望していると申し上げているわけではないのです。

遠藤 北垣先生は問題提起をしておられるのですから。

河野 世俗化は同志社だけの問題でも、日本だけの問題でもないですね。

北垣 そうです。西洋の諸大学の長いキリ

スト教の伝統を見ていますと、明らかに世俗化の方向に走っているわけですから、同志社大学だってそうなる傾向があると見ております。ですが、けっして絶望しているわけではありません。ただ、新島襄の「同志社大学設立の趣旨」が、二十一世紀にどういう形で生かされるのかということが大きな問題だろうと思っているわけです。

それで最終的には、新島襄の人格的な感化を受けた弟子たちが、新島襄の精神を同志社に伝えてきている。遠藤先生がおっしゃったように、牧野先生、湯浅先生、大塚先生、その他いろんな先生方を経て、私たちに至ったわけですから、やっぱり人格の影響が最終的に教育ではものをいうと思っておりますので、そういう人格的な影響の与えられる環境があるということはいへんな希望であると思っています。

■どのように教育するか

河野 原先生はいかがでしょうか。先生は同志社大学が新しい田辺校地へ移転した直後に学長をおつとめになられて、いろんな面

で苦労が多かったでしょうが……。

原 自分ことから申し上げて恐縮なんです。私は京都の国立の大学から同志社へ一九五四年、昭和二十九年に奉職させていただくことになったわけですが、それまで同志社のことは、実のところ余り知らなかったのです。

奉職して時間がたつにつれて、この大学は国立にはないすばらしいものを持っているという実感をもつようになりましたね。学生を見たり話し合うのを聞いていまして、国立とは違うのです。人間らしいと申しますか。その後、新島先生の「同志社大学設立の旨意」などを読ませていただいて、すばらしい大学だという感をいつそう深くしました。

それで私が学長に在任中いちはん心配しましたことは、いまお話があつたキリスト教主義教育ですが、それをどうやって維持していくかということでした。ご承知のように「寄付行為」の冒頭には、キリスト教主義で教育をするとうたっていますし、「同志社綱領」には、これは不変の原則だから絶対に変えてはいかと明記しているのです。私はこれをたんなる粹とは考えておりません、そこに同志

社の基本的な精神というか方針が出ているわけです。この方針をどうやって守っていくかということが、いちばん大きな問題でした。

女子大学のほうはそれをきちつとやっておられるし、他の学校もあまり問題がないですけれども、大学の現状だけがあまり感心できないのですからね。新島先生の理想ですね、それを私もあとに続く者は、先生のご意向を体して、できるだけその線に沿った形で学生を指導し、学校を運営していくというのが、私は私どもに課せられた義務だと思つてますから。

岡野 女子大学もちゃんとやれているというわけではありませんけれども。

原 それはまア、理想的な姿ということからいえばそうかも知れませんが、大学ではたとえばチャペル・アワーですね、私自身も実はあまり行っていない、二部のチャペル・アワーにたまに行くくらいで、行つてみるとまことに寥々たるものなので、その実態を見ましても残念に思うのです。

大学の宗教部では、少しでも学生たちに新島先生の理想とか同志社精神にふれてもらおう、理解してもらおうと思つて、チャペル・

アワーなどをやっていますし、学生部でも図書館キャンプとか、以前は安中キャンプとかいろいろやっていくわけです。それに参加した学生にとつては、目に見えないかたちでプラスになっていると思います。けれども特にチャペル・アワーなど出席者が実に少ないわけですね。

河野 函館キャンプはいまも続いているし、学生たちに人気があるようですが、安中キャンプは中止になったままですね。参加希望者があまりいないからではないでしょうか。

原 どうしたらいいのか私にも名案がございませんし、憲法で信教の自由が保障されているといつたこともございまして、強制するわけにはまいりません。しかし、キリスト教を徳育の基本とするというのはこの学校の基本方針ですから、強制はできないにしても、卒論を指導している学生たちに、「同志社というこんなすばらしい学校におりながら、チャペル・アワーに一回も出ないで卒業していくというのは、君ら個人個人にとって非常にマインナスのようにばくは思うよ」というのです。そういう考え方で、強制ではないんですが、「ばくも行くから一緒に行かないか」と、去

年ぐらいいからぼつぼつ言い出したりして、まあいくらかチャペル・アワーに行く学生がふえてきているといった状態です。

教職員も学生諸君も含めまして、新島先生生誕一五〇年を機会に考え方を变えたいと思いますか、新しい出発をしていくという大事な時期にきているんじゃないかなと思いますね。

この間、チャペル・アワーへ行きましたら、教職員のコーラスのグループができるということを開きましてね、ばくは非常にうれしく思つたですね。

遠藤 教職員の？

原 教職員。あそこで歌っていただけというところでございますから、非常に悲観材料が多い中で、少しずつ明るい面も出てきておるなという印象を持ちました。

河野 教職員主催のクリスマスは以前からありましたけれども。

遠藤 礼拝をやつて、それから神学館一階の教室で簡単なティーが出たりして。

河野 田中先生、原先生のお話に関連していかがですか。田中先生は牧師さんでもあつたし、高校校長、幼稚園長など、キリスト教会と若い人たちの教育にずっとかかわつてき

ておられるわけですが。

田中 同志社の「綱領」とか「寄付行為」

などに、キリスト教主義を徳育の基本とするというふうに書いてあるけど、そういう言葉ではなくて、さつきもちよつと申しましたように、そういうものが受肉し結果して生きているという、これが大事だと思うんですね。

幼稚園の子供にせよ、中学生にせよ、理屈以前にそういったものが目の前に実際にならないと同志社の教育というのはできないだろうと思うんです。ですからそういう意味で、遠藤先生

などがおっしゃっておるように、新島先生に引かれて、同志社で教育の一端を担っている一人一人が、それこそ人間らしゅう、新島先生がいわれたように自由であり、そして平等といった精神に生きていることです。いちばん望ましいのは、クリスチャンであることですけれども、全部が全部そういうわけにはいきませんから、本当に人間らしく生き生きと生きている、そして謙虚である。神様の前で、また人の前で謙虚であるというような、そういった生きている人格がいまの同志社にいちばん必要なようにぼくは思いますね。

河野 言葉だけの教育では駄目なんだと

……。

田中 とくに中高のレベル、それから幼稚園

のレベルというのは、まずそういうものので生徒、園児と対していくことが非常に大切だと思います。中高のレベルでは、それを少しずつ理論立ててといひましようか、順序を追うて、キリスト教とはどういうものなのか、あるいは新島先生の中心はどこにあるのかというようなことを少しずつ案内をしていく、そういうことがあわせて必要だろうと思いますね。

北垣 原先生のお話にたいへん感銘を受け

ました。原先生は学長におなりになってから京都教会に熱心に出席されまして、とくに大山先生の説教を熱心に聞かれまして、私は当時、京都教会員でしたので、先生が来られると本当にうれしかったです。その精神をチャペル・アワーにも生かしていられつしやるといふことはすばらしいと思います。先生のような方がいらつしやる限り同志社には希望が持てます。

■キリスト教と同志社の伝統

河野 新島の理想というか、同志社の伝統は生きてゆくと……。

北垣 さつき私は世俗化と申しましたし、

西洋の諸大学もそうなってきたている、同志社もそれは避けられないかもしれません。パリ大学にしても、オックスフォード大学にしても、もともととは学者たちの集団、コミュニティーが大学であつたわけです。それからハーヴァード大学にいたしましたが、マサチューセツ・ペイ・コロニーの植民者たちがどうやって自分らの後継者である牧師を養成するかということでハーヴァード・カレッジをつくつたというふうに歴史は記しております。ですが、それじやいまのバリ大学、オックスフォード大学、ハーヴァード大学等々を見ますと、創始者たちの精神がそのまま生きていくかといひますと、それは言えない面が多いように思いますね。そこで、そういう背景に照らして同志社のことを考えてみますと、確かに新島が説いたキリスト教はニュー・イングラランドのピューリタニズムに基づくキリス

ト教でありまして、キリスト教の一つのいき方であったと私は思っています。これが二十一世紀をだんだん過ぎるにつれて、物質的な繁栄、学問、科学などが伸びれば伸びるほど世俗化は避けがたいだろうということ、これは私はよくわかるわけです。

でも、同志社が独自性を発揮するということであるならば、キリスト教を守らなきゃならないと、一方において非常に感じているんですが、二十一世紀の同志社を考えますときに、何でもかでもクリスチャンの方でなければいけない、いわゆるクリスチャン行動ということに果たして固執できるだろうかということになりますと、私はできないかもしれないという悲観的な見方をしております。キリスト教を絶対化する考え方は、もう駄目じゃないかと。

遠藤 おっしゃることはよくわかるんですが、ピューリタニズム、これは歴史的な現象であって、キリスト教史の一時期の、とくにニュー・イングランドのちよつと特殊なタイプだろうと思うんですね。それを新島先生は学んで帰ってこられたわけですが、ピューリタニズムがキリスト教全部を代表するかとい

うと、それはそういうことにはならないだろうと思います。私は歴史家ではないからきちんとしたことは言えませんが、同じ時期でもヨーロッパのキリスト教とニュー・イングランドのキリスト教とはかなり違うと思うんです。ピューリタニズムが教えてくれたタイプの救済観というのが、現代の世俗化している状況の中でどれだけの意味があるだろうかという、そういう懸念があると思うんです。

私は新島先生の生涯には幾つかのターニングポイントがあったと思うんです。たとえばワイルド・ローヴァーの船上でのヨハネの三章十六節に思い至るといった宗教体験ですね。それからあれは一八八四年にスイスのサンクト・ゴットハルトの峠で心臓発作で死を覚悟されたときに遺書を書いておられるんですね。その中に「生きるも死ぬもキリストのため」というふうに書いておられた。これは先生の生涯の実存的といってもいいし、思想的にといつてもいいだろうと思うのですが、決定的なポイントだと。そこで与えられた人間の解放といえますか、あらゆるものから解放されて、キリストだけが生きるも死ぬも、どの場合においても起点になっている。そこを

中心にしてすべてのものは乗り越えられていく。非常にポジティブな面が出てくるといった点。

先ほど田中先生がいわれた人間が生き生きと生きている、何が人間をポジティブに生きさせるかは、そこにかかっていると思うのです。

河野 現代においてもそうだとお考えでしょうか。

遠藤 キリスト教の二千年の歴史を振り返ってみて、そこがいちばん大切なポイントだと思っています。

田中 キリスト教というのは、学問の世界であれ教育の世界であれ己れを絶対化しない、神様の前でみんなが謙虚であることを尊ぶので、とくにキリスト教主義の同志社では、そういう謙虚な生き方が大切なんです。

だから、岡野先生がおっしゃったように、全部が礼拝に出るというような、そういうさまじいものではなくて、やはり人間の生き方そのものにかかわる事柄のように思うんです。それは理屈やなしに、この同志社という広場には園児から大学生までそろっている、その中でそういう生き生きとした人格として

謙虚にぬかず姿勢が実際に生きて働いているかどうかということだと思うのです。

岡野 私は先生方がいわれるキリスト教についてとやかく申し上げるわけではないのです。北垣先生がいわれる世俗化とか終末論もわかるように思います。私が言いたかったのは、新島先生とか同志社の伝統といいますと、すぐにキリスト教の問題になりますね。キリスト教のほうが先に出てくるんです。しかし、私は新島先生の実像を知る必要があるんじゃないかと思うのです。新島先生教育理念というものから考えていかなんといかんのじゃないか。新島先生の教育とは何かと。これはもちろんキリスト教に根ざしたものではありませんけれども、キリスト教そのもののじゃないわけですね。人格形成とか、そういったものが最終的には目指されているわけですから。だから、新島襄の教育理念とはどういうものかということをもう一度同志社は考えていく必要があるんじゃないかと。そうすることによって、二十一世紀のたいへんな時代に個性をさらに増していくことができるんじゃないかと思うんです。

キリスト教を初めに前面に出していきます

と、さっきの話やないですけど、新島先生のキリスト教はピューリタニズムだ、いや、別のキリスト教派もあるんだといった議論になりますしね。だからノンクリスチャンであろうと、クリスチャンであろうと、新島先生の教育はこういうところに目標があるんだ、こういうことを目指しておられるのだということをもう少し前面に出していくことによって、同志社の独自の教育というものが出てくるんじゃないかという気がしますので。

北垣 岡野先生のおっしゃることに私は一応賛成なんですけど、しかし、一応という理由は、最終的には、新島襄もキリスト教の光に照らして裁かれなければならない面もあるということをは言いたかったからです。

なぜかという、たとえば一つの例を挙げますと、新島襄の晩年の関心事の一つは、もちろん同志社大学設立の募金でした。そしてもう一つは日本全国の伝道だったんですが、さらにいま一つは一致教会と組合教会の問題だったんです。この合同の問題が百年たつたいまどうなっているかという、合同してちゃんとうまくいっているわけです。

新島襄の意図にもかかわらず、百年たつ

ちに、歴史がそれを裁いた形になってます。そしてそのほうがいまとなってはよかったと言わざるを得ないと思います。とすると、新島だってビジョンに限界があったと言えるんじゃないでしょうか。だとするならば、先生がおっしゃるように、まず新島があつて、それからキリスト教という考え方は、それはそれである範囲内での議論には大事ですけど、しかし最終的にはやっぱり新島を生かしたものはキリスト教だったんだから、キリスト教の光に照らして新島にも光を当ててみなければならぬ。そして新島にあつた限界を克服して、後輩である私たちがさらに二十一世紀を目指していかなければならないという構造にはなりはしないでしょうか。

岡野 だからね、私は新島先生の教育理念を言っているわけです。新島先生の生涯をどうこういうのじゃないんですよ。学校というのは一つの立学の精神という教育の理想を持っていますからね。新島先生の教育理想はこうだったんだということ、もう一度考え直して見る必要があるのです。相手はクリスチャンばかりじゃない、ノンクリスチャンの学生のほうがむしろ多いわけですから、そうい

う人に田中先生がおっしゃったように、神の前に謙虚になりなさいと言われても、たとえば仏教徒の学生なんかですと、「どういうことや」と、こうなるんじゃないかと思うんです。ところが、「同志社の創立者である新島先生の教育理想はこうだったんだ、これを一べん読んで同志社教育とはどういうものか勉強してごらん」と勧めたり、そういう話をしてやる、そのほうが本当の同志社の独自性といえますか、同志社教育がアピールできるんじゃないかと思うのです。

北垣 ですが、新島襄の「同志社大学設立の旨意」などを読みます際に、これをただたんに読むのみならず、これにキリスト教の光を当てて読むと一層よくわかるようになるわけです。

岡野 それは深くなるでしょう。なるでしょうけど、最初まずキリスト教ありきじゃなくて、同志社の立学の精神というのはいくものかということ、もしくは前面に出していくほうがいいんじゃないかと思えますね。

■同志社の独自性

河野 両々相まってという具合にやれることかどうか。(笑)

先ほどのような同志社の独自性といった問題が、ちよいちよい出ているのですが、それは新島の教育理想と同時にキリスト教と無関係のものではないでしょうね。

原 私は先生方のいいご意見をお聞かせいただいて非常に感激しておるんですが、一つ心配なことは、北垣先生がいわれる世俗化の問題なんです。自分がいますので大学を見ておつてよくわかるのです。あと八年後ぐらいで就学人口が大体二十五パーセント減る、二百万ちよつとのところが百五十万ぐらいに減つてしまう。そのときになつてみないと本当のことはわかりませんけれども、非常に厳しい状態を迎えるのは確かだろうと思うのです。先ほどからお話がありましたように、サバイバルの問題がありますね。大学もできるだけ内容をよくしていこうと意欲に燃えてやっておるわけですね、工学部はすでにやっていただいてますから、いいんですけれども、

専門の領域においても、大学間の競争とか、あるいは国際間の競争とか非常に激しくなっています。それから情報化社会とか高度科学技術社会とか、そういうことになってきますので、先ほど田中先生がおっしゃったような新島先生の温かみというか、温情というか、そういう面と、一方で非常に厳しい面があつて当然だと思ふんです、学問の場です。学問は非常に厳しいものだと思ふんです。ですから厳しい姿勢と温かい思いやりの気持ちですね、そういう気持ちを忘れないで、おつてほしいとばかりはいま痛感しておるんです。そういう意味でもつていい教育をするということが……。

同志社の世俗化というご心配もございましたが、やっぱり自由な雰囲気勉強ができる教育ができる、研究ができる、それが最高だと思ふんです。新島先生の温かみ、それから先生ご自身は意志の方でありましたし、厳しい面がございましたね、その厳しさ。時代が変わつてきてもその両面を忘れないで、おつてほしいなというのが私の願いです。本当にそれがいいとこれはえらいことになる。同志社も普通の国立や私学と全然変わらない学校に

なってしまうのですね。やはり同志社は独自の一本筋が通ったものがあって、そして学問もできる、立派な学生も卒業していく、そういう形でないといかんと思うんです。

遠藤 いま「自由」ということをいわれましたが、何人間を自由にするのか、何人間をボジティブに生き生きと生きさせるのか。私は二千年のキリスト教の歴史を振り返ってみて、いちばん大事なポイントはそのじやないかと思うのです。

この自由というものも、たとえば大隈先生も福沢先生も自由を唱えて、早稲田や慶應をつくっておられる。早稲田、慶應の建学の精神も自由が大切なポイントだと思うんです。ですが、その自由はどこからくるのかということは、福沢も大隈も言っておらないと思うんです。これも私は専門家じゃないから、福沢、大隈研究家から反撃を食うかも知れませんけど、新島先生はそのところを言っているわけで、それが私は同志社のキリスト教のいちばん大事なポイントだと思う。自由とか自治とかいう場合に、それはたんなる法的なレベルのことではないし、制度的なことでもないし、社会的なことでもない。宗教的な

体験をもっている、そんなふうに思いますが……。

田中 私もそう思うんです。新島先生自身が神様の前にあつて謙虚でいつも自由であろうとなさった。そういう動きがこの場所にあるという、そのことが同志社の使命やないかなアと、こうぼくは思うんです。それは学問的な営みの中でだつて必要だし、キリスト教というものが人々に問うているんじゃないかなと。

北垣 私はやはり同志社が創立者の精神を守り、目に見えるものよりは、目に見えないものに目を注ぐというその精神を大事にするならば、そしてあくまで人間というものは神からつくられたものであつて、謙虚にその可能性を追求しつつ、結局、神の御心を実現することができるという構えがあるならば、そういう精神的な伝統は二十一世紀にさらに守り続けていくことができるんじゃないか、そんなふうに思います。

河野 そういう精神的な構えができておれば、同志社は独自性のある学校たりうると……。

田中 先ほど岡野先生が、「クリスチャンで

あるなしにかかわらず、同志社の出身者は同志社人としての特質をもっている」といわれましたが、それはまことにそのとおりですね。

同志社中学と高校出身者には、弁護士、検事、判事などがわりあい多いんです。たとえば中学で私の一年上級だった中坊さんは、日弁連の会長をやりましたしね。ラグビーや運動部の連中が案外その中に多くて、私は親しくしてしまして、呼び出されては話し合ったりするんです。

法律家の連中が言いますのに、自分たちが同志社で学んだことは、人権と平等ということだと。人権というものの大切さ、差別をなくしてみんなが平等でなければならぬという意識ですね。私は、それは新島先生のお考え、新島先生の生き方そのものの中の、全部じゃないですけども、非常に重要な部分を彼らは彼らなりに継承していると思うんです。そして彼らはそのことのために闘いもし、そのことのために一生懸命日々努力を積んでいるわけです。

法律家ではないですが、同志社中学、高校、大学と学んだ、それこそ同志社生え抜きの天野礼子という卒業生がいますが、彼女はいま

長良川の洗堰の問題で、洗堰は困るというところで運動の頂点に立っているのです。彼女は一生懸命、ある意味における同志社人として働いている一人だろうとぼくは思っています。それから重い知的障害をもった子供たちとともに、そこから学びつつ生きている福井君だとか、そういう人材をいま同志社は持っているわけですね。それは新島先生以来の独自の伝統が、目には見えないけれどもこの学校に生きていて、学生生徒は知らず知らずのうちにそれを吸収しているんだと思うんです。

岡野 四年間のあいだに、大なり小なり身につけて卒業してくれますからね。学校のほうでは二十一世紀に向けて、更によりよい教育をすることが出来るように、新島先生の教育理想を、うたい文句でなしにここらではつきり見直してみる必要があるでしょうね。

■新島襄を受け継ぐには

河野 独自性といったものも、そうした教育努力なしには確立できるものではないということとはよくわかりました。ただ、そこで気

になることの一つは、新島の時代がだんだん遠ざかって行くことです。

たとえば遠藤先生が先ほど紹介下さった牧野虎次先生ですね、牧野先生は新島が生きていた時代の同志社に学んだ方です、直接の教えをどれほど受けられたかはともかく。その牧野先生に遠藤先生は接することによって感銘を受けられた。そうした直接間接に人格的感化を受けた人たちが、定年退職されてしまつて、もう一人もいらつしやらないのです。孫弟子、曾孫弟子ばかりになつてしまつて、その孫弟子もいなくなつた同志社に、どういふかたちで新島を伝えていくことが可能なのかと、ちよつと心もとなひ気がしましてね。いま田中先生からお話があつた同志社の個性を育てるという意味からも。

田中 いま必要なことは、井上勝也先生や河野さんのような新島の語部を次の世代のために育てることです。そういう方がいろんな所で講演して下さるとか、書いたものを発表して下さることによつて新島を伝えていただかないことには、同志社の中に新島先生の香りとどうか、雰囲気とどうか、そういうものを醸し出すことが出来なくなるおそれがあり

ますからね。

遠藤 そしてもう一つは、たとえば「寄付行為」とか「学則」とかに、キリスト教主義をうたつていっているわけでしょう。これを守ることが一つ大事だと思うんですね。この看板をおろすことになつたら、同志社は同志社でなくなるだろうと思うんです。こういうある意味でのハード面がきちつとしているかどうかということは、同志社としては大事なことだろうと思う。したがつて、組織とか機構とか人的配置とかにまで及んでいくだろうと思うので、そこら辺まで神経が行き届いているかどうか。みんながそれを守ろうとしているかどうかという、これが一つですね。

二番目には、新島の直弟子、その孫弟子と

河野 そうですね、年月とともに。

遠藤 ジェネレーションとしては消え去つていくわけですが、それを継承していくためには、いま言つたハード面がきちんとしていることが大事だけれども、二番目には、新島先生の教育理念は何であつたのか、キリスト教と彼の教育理念とはどういう関係にあるのか、どういう位置づけになるのかということ

を明確にする努力が必要だろうと思う。これはやっぱり研究ですね。そういう研究の体勢とか、熱意を大事にすることだろうと思うんです。新島研究会というものがありますが、ああいうふうな研究がどんどん盛んになる。学内において絶えず掘り起こされて、歴史的な研究の成果が出ていく。みんながそれによって啓発されるということがあったらいいだろうと思う。

三番目には、さつきから出ている教師の問題ですが、どういう人が教えているのか、教師のみならず、職員としてどういう人がこの学園で仕事をしているのかということが本当に大事だと。学生生徒は教師を見て学ぶし、教師を批判しながら乗り越えていくという、そういうことが非常に大事だと思うので、そこら辺ですね。

原 気がかりなことは、新島精神、同志社精神というようなものが今後とも継承できるかどうかです。

ぼくは講義のときに「君らは曾孫だから」と学生にときおり言うことがあるんですがね。二十一世紀に向けて社会の経済状態から科学技術まですべて変わっていくでしょう。変わ

っていく中で、やはりそれだけに私はメンタルな面が要るんじゃないかと。とくに同志社にはすばらしいものがあるんですから、それを機会あるごとに理解させていく、啓蒙していく。効果はすぐにはなかなかわからないかもしれないけど、やっぱり努力をしていくということが必要じゃないだろうかと……。女子大学は立派にやつておられますけれども、大学の現状はさつき言いましたように問題があります。だから私は、同志社大学にいる間に、一回でもチャペル・アワーに出てほしいというのです。きつとそれは新島先生の願ひでもあっただろうと思うんです。

人間関係も非常にドライな面が多くなるとか、やりきれないような思いをさせられる社会に出て、精神的に豊かなものを生み出していく、いろんなところでアクティビティをもつてやれるような人物をつくり出すよう、新島先生のあとに続く者たちが考えながらやっていかねばいかんだろうと。

それにはやはり、具体的な効果がある方策が必要になってまいります。いまの学生たちは漫画とかパツと変わるものがすごく好きですね。そういう学生たちに対して、どうい

う方策が効果的なのか、英知を集めて考え実践する努力をしていく必要があると思っています。

河野 先ほど岡野先生が、まず「同志社大学設立の旨意」といったものに現れている新島の教育理念、教育の理想といったものを教えるべきだといわれて、私も同感なんです。それをどういうふうに教えた方がいいのか、教師と方法が問題ですね。

それから、新島を偶像化してはいかんといいうことも言われましたけれども、この問題も実際にはどういう教え方をすれば偶像化や神格化が避けられるのか、また学生に興味をもたせることができるのか、そこに重要な問題がありますね。

岡野 確かに大事なことで、これからそういう努力はやらなきゃいかんと思えますけどね。たとえば河野さんが本当に同志社の一本一草についてまでというほど、折に触れていろんな建物とか樹木などの歴史的な説明をやっておられますね。ああいうようなことが本当は大事なんです。日常性のあるものでなけりゃ。学長は入学式か卒業式ぐらいでしか話をするのがないですから。しかし、同志

社の学長たるものは、入学式や卒業式には新島先生の教育について一言述べる必要はあると思いますけど。

原 それは当然ですね。

北垣 いまのご意見に賛成です。「聖書」にある「祈をうるも得ざるも」伝道しろというパウロの精神だと思うんですね。ということでは、新島襄に關していちばんいまの若者にアピールするのは映画だと思えますので、「女の闘い・新島八重の生涯」でしたか、あの中にはいくつかの間違ひはあるんですけども、それにもかかわらず、あれで非常に感銘を受ける人々が多いわけですから、やはりこういうメディアは使うべきだと思います。来週は女子大学の方では *Life and Letters of Joseph Hardy Neesima* を材料にして、新島襄に関する芝居を上演なさるそうですね。一生懸命にいま女子大生が練習しているそうです。あれもいい試みなんですけど、ぜひ新島襄という映画が欲しいと思っています。ぼくは河野さんが最後の仕事に、そのシナリオをお書きにならないかなアと(笑)。この方はたいへんな文学者なんですから、ぜひそういうふうなこともやってほしいなと思っていますんですけど

も。

河野 えらいことになってきた。(笑)

北垣 卒業生の中には映画人がいるわけですから、そういう人たちを大いに活用して新島襄の伝記映画、それを見れば新島襄が何を考え、どういう闘いをしてきたかがわかり、観た人にアピールするようなものを、生誕百五十年記念行事の仕上げとして、ぜひつくっていただきたいなアと思うのです。

それと同時に、この『同志社時報』のような雑誌などを、学生たちにもっともつと読まれるようにすることですね。

河野 学生を対象にしてはいませんから、いまのところ。大学には学生対象の刊行物がありますけれども。

北垣 読んでもらえるようにしていただきたいですね。それから『新島襄全集』。あれが全十巻完結して、いつでも読めるようになっておれば、心ある学生、先輩、教職員は最後はあれに帰っていくと思うんです。いろんなところからの感觸では、わりあい読まれているなというふうに思うものですから、やはり最後のよりどころは『新島襄全集』になると思います。とにかく、絶えずそういう形で

新島襄の材料があることを私は期待するわけです。

河野 この間、同志社のある学校で、教室で授業に使えるような新島のビデオをつくってくれませんかといわれました。十分か十五分程度のものでいいからと。

田中 中学、高校生には、そういうものがぜひ必要ですね。

原 私もそう思います。私は授業でよくビデオを使うんですけども、新島先生のビデオを三十分くらいのものでいいからつくっていただいて、田辺校地などで授業をしておられる先生方の裁量で、授業の終わりなどに一回でもいいから学生たちに観せてやっていただけたら、ほんとにいいなと思いますね。

田中 同志社創立百周年につくった映画があるでしょう。あれはちよつと長いけれどもほかにないんですか。

河野 受験生向けのものは大学にあるようですが。

岡野 宣伝用ではなくて、新島先生に焦点を合わせたものをつくっておけば、いつでも利用できるわけですから。私もそういうものがあればいいと思いますね。

■「宗教学」の問題

岡野 話がありますが、いまカリキュラムの抜本的な検討がなされていますけれども、大学の個性を出すようなカリキュラムをつくらうということで、大学に置かれているのは「宗教学」でしたか。

原 宗教学です。

岡野 それは全学部学生の必修ですか。

原 必ずしもいま必修にはなっていないですね、残念なんです。

岡野 選択科目にはあるんですか。

原 選択のところで、必修のところで、学部によります。

岡野 その辺のところもやはり考える必要があるんじゃないでしょうかね。これは各学部とも必修にするぐらいの見直しね。

原 まあいろんな考え方がございましてね。

岡野 それはわかりますけれども。

原 大学紛争を契機にして崩れてきましたね。

岡野 だから、この時期にもう一度考えて下さると……。

遠藤 学部が幾つもある大学では画一的にやることは難しい場合があるでしょうね。同志社でも経緯があるわけで、一挙にもとへ戻すことは難しいだろうと思いますが、いまの大綱化は、文部省はとやかく言わんから大学の独自性を出せ、学部の特徴を出せといったことが言われますね。ですから学部ごとにキリスト教主義というのをどう考えているのか議論をしてほしいですね。その結果、宗教学をやっぱり必修にするとか、あるいは科目名とか内容を変えて、キリスト教主義を生かす、学部の根幹を成すような科目をどう考えるかというような、そういうことを議論して考えを煮詰めていかなければいけないですね。

岡野 最近は学科目も細分化してきていますからね。だからたとえば新島襄の教育とか、そういうような科目を置くこともできるわけですよ。そのぐらいまでいきますといいんですけれども。

原 ですから各学部、学科の皆さんのご意向がね、そういうふうになっていただければ非常にありがたいんですけど、むしろ逆のよいな面もございますしね。

■新島襄の国際性・提言

北垣 いろいろ話が出ましたが、まだ国際人としての新島襄という観点からの話がほとんど出てないんですね。私は同志社における最初の国際人は新島襄だと思っています。新島襄は本当にアメリカにおいてもたくさんの友人、先生、恩人、同志、そして支持者を得た人でありまして、ああいう創立者が同志社にいるということは、同志社にとって非常にさいわいなことであったと思います。新島に学んだその弟子たち、海老名にしろ、小崎にしろ、あるいは横井にしろ、みんな国際人クリスチャンという面を濃厚にもっています。

河野 原田助とか。

北垣 原田はそうですね。そして二十世紀では湯浅八郎。そして戦後は数え切れないぐらいの国際人が出ているわけです。これはやっぱり新島の偉大な伝統だと私は思っています。
河野 私は新島の国際性を考えるときに、彼の講演草稿の中の「愛人論」を思い浮かべられます。その中でどういつているかという

と、愛国というと、どうも他の国を敵視することによって自分の国を守つていこうとか、国民を團結させるというか、どうしても排他的になる。だから自分は愛国じゃなくて、愛人主義でいくんだと。人を愛するという観点からいけば、そこには国境があり得ない。そういう意味で自分は愛国を唱えるというふうに言つてましてね。これはやはりキリスト

の教えを新島が身につけていた証拠なんで、わが国にはそういうキリスト教に根ざしたヒューマニズムといったものはなかったんです。

私は同志社の国際主義は、新島のそういう思想を継承していく必要があるだろうと思つております。

時間もなくなりましたので、言い残されたこととか、この際、これだけはぜひひいておきたいといったことがございましたら、ひとことずつお願いします。岡野先生からどうぞ。

岡野 新島先生は大学ででき上がるまでには二百年かかると言つておられますけれども、その二百年というのは、ちょうど二十一世紀の中ごろくらいになるんじゃないかと思いますが、そのときに新島先生が落胆されないような同志社学園であつてほしいと思います。

北垣 私は新島襄の書いたものの中で、いつも感銘を受けるのは、横田安止あての手紙に、「わが校をして深山大沢のごとくになし、小魚も生長せしめ、大魚も自在に發育せしめ」という、あのビジョンが大好きでして、新島の自由の考え方があそこに非常に反映しております。

それと、遺言の中にある「社員たるものは生徒を丁寧に扱うべきこと」、それから「偶儻不羈なる書生を庄束」してはいけないという、これは新島の非常にすごいアイデアで、どこの学校でも適用できるなと思います。

遠藤 新島なり同志社の教育理念の根本は何かということをも新しく掘り起こして考え続けていくという、そういう伝統が欲しいと思います。恐らく自由と良心ということろにいくだろうと思うんです。この教育理念、あるいは哲学がいかに大事であるかということとは、ほかの学校を見ますというときと非常によくわかるのです。

それからもう一つ、先ほど言いましたけど、早稲田も慶應も創立者は自由を標榜した。そこ同志社の自由とはどこが違うのか。つまり同志社の哲学、理念とかいったものの根本

は何だろうかという、そこが非常に大事なところだと思ふんです。新島を動かしたモチベーションは何だろう。新島の哲学の原点は何か。これはキリスト教にいくだろうと思うんです。そうした根本的な問題の掘り下げた検討、研究、伝統の継承発展を期待したいと思ひます。

原 同志社大学を含めまして私学は今後、非常に厳しい時代を迎えると思います。私は新島先生のおつしやつている中でいちばん感激しておりますのは、「送歳の詩」の最後のところです。「劣才たとえ済民の策に乏しくともなお壯図を抱いて此春を迎う」と。あの気持ちをあとへ続くものもあって、いろんな苦難はあるだろうけれども、乗り越えていつてほしい、またいかなければいけないと思つておりますし、そのことをとくにお願ひし、強調もしておきたいと思ひます。

田中 ぼくは同志社の中に新島の語部が次々と現れてほしい。語部というのは、単に新島を語るだけではないに、新島を生きているような、そういう人格が絶えずあつてほしいと思うんです。

それと新島先生のいろいろな資料、遺品、

そういったものの展示を、岩倉、香里、田辺、今出川、それから女子大、あらゆるキャンパスでやってほしい。それを見、それに接する機会がつけねになきやいかんと思うんです。

語部と展示、そういったものによって新潟は現代に生きていくんではないかなと、ぼくは思っています。

河野 私の願いは平凡ですけども環境の整備です。語部といった人的なもの、展示といった物質的なもの、そういったすべてのものを含めての環境の整備です。それは、さまざまな分野の学問を志す優秀な青年を受け入れて、彼らをキリスト教の感化を与えうるいい環境のもとにおきたいという願いを、新潟がずっと持っていたからでもあります。

それではこの辺で座談会を終わりたいと思います。ご多用中の時間を割いてご出席下さいまして、とても貴重なお話をおきかせいただきましたことを感謝いたします。どうもありがとうございます。

(一九九二年十二月十二日収録、於担当理事室)

『同志社百年史』について

「通史編」(全二巻)

同志社百年の歴史を五つに時代区分し、次の五部から成っている。

第一部 創業と成育 明治前半期

第二部 キリスト教教育の受難(明治後半期)

半期)

第三部 大学への道(大正期)

第四部 戦時下の学府(昭和前半期)

第五部 再生と発展(昭和後半期)

上野直蔵総長は「通史編」の「序」で、「同志社における徳育の基礎であるキリスト教は、それがキリスト教たるがゆえに、少なくとも一九四五年にいたるまで国粹的権威筋から胡乱な目でみられ、疑問視され、敵視されてきた。(中略)

同志社を護るための先人たちのすさまじいまでの攻防は、まさに一つのドラマであり、読むものをして緊張と畏怖の念を起こさせるであろう。この書は同志社の犯した数々の失敗や恥辱の部分をも隠すことなく記している。」と述べておられる。ラットランドのグレイス教会における新潟裏の、学校設立に関する訴えを起点とする「通史編」は、確かに、キリス

ト教主義をめぐる同志社の攻防を軸に展開されているといえよう。もちろん同志社の諸制度や諸学校の変遷、そこで生きた学生生徒を含む諸先輩の動向などは、それぞれ独自に、読者に訴えるものをもつはである。

「資料編」(全二巻)

「通史編」の叙述に用いられた基礎資料およびそれに関連のあるものを中心に編纂されている。同志社開業関係にはじまり一九七五年度までの主要な資料を収録、原資料による同志社百年史といつてよく、それ自体自立性をもっている。収録資料三五〇点、従来活字になっていたものが、すなわち未公開資料が数多く含まれており、読者は同志社史の新しい一面を見出すであろう。研究者の期待にも応えうるものである。詳しい同志社年表を添えてある。

「通史編」一、六五八ページ。

掲載写真 三二五点。

頒価・六〇〇〇円

「資料編」二、一九二ページ。

頒価・二〇〇〇円

発行・学校法人同志社
取扱い・同志社収益事業課
(五〇七五—一五一三—〇三三八)